

都

雅な夕暮れに荘嚴の気の満ち満ち
高下駄の音を転がしつつ歩く私に
朱色の光は時の道を指し示し
浴衣姿の私に千古の重みを与える

軒並び、互いに向かい合い
私の歩く姿を厳かに見送り
打ち水にわびしく光る石を敷き詰めた道に
苔むした低い音が私の足下を過ぎる

^{いま}現在が時の流れの舌先であることを
この先に未だ時の存在せざることを
私が時の舌先に立ち、今
時と共に世界を造っていることを、信じたく・・・

ならばこの夕暮れも私のものである
ならば明日の夜明けも 私のものである

(1982.8.29)